

キリスト教とことば

Christianity and Word

水谷 誠
Makoto Mizutani

一 「ことば」について

キリスト教について「ことば」との関連で案内をします。「ことば」は『新約聖書』の言語であるギリシア語では「ロゴス」です。その「ロゴス」という概念は、キリスト教的・ギリシア的西洋の世界に、キリスト教という一つの宗教の枠を超えていろいろな仕方で広く深い影響を与えてきました。ここでは、この「ことば」という概念の果たしている役割に目を向けつつ、キリスト教という一つの宗教が歴史の中で遂げてきた思想的展開を振り返ります。

言うまでもなく、キリスト教にとって、ことばは極めて大切なものです。キリスト教は『聖書』というテキストに基づいています。この聖書はことばで記されています。この聖書の中にはことばがあります。文字通りに「ことば」がそこに詰まっています。キリスト教は聖書に記されたことばに基づく宗教です。一般に聖書は「神のことば」と言われますから、キリスト教はこの神のことばに基づき、導かれて生きていこうとする宗教だと言えます。さらに、この「ことば」は「文字」という通常の意味合いで使われるばかりではありません。たとえば、新約聖書の「ヨハネによる福音書」冒頭部分を見ましょう。「はじめに言^{ことば}があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。……言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」（第1章1～2節、14節）。

すなわち、ことばは神であり、同時にこのことばが肉体となってこの世に登場した。つまり神の子であるイエス・キリストが誕生したと記されています。ここでは、「ことば」と神は一つであると考えられていると同時に、イエスという歴史的人格につい

て、肉体化した「ことば」だと説明しているのです。イエス・キリストは神のことばです。さらに『旧約聖書』の「創世記」冒頭を見てみましょう。天地創造の物語です。「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった」(創世記第1章3節)。神がことばを発すると、それは現実のものとなります。このような例を見ますと、キリスト教にとって「ことば」は特別に重要な意味を持っており、単なる文字を指し示すにとどまらず、神と関係する種々さまざまな次元で用いられていることが分かります。キリスト教とは、実に、この神のことばをめぐって、それに生きる基盤を与えられながら営まれている宗教なのです。

換言すれば「神のことば」に活かされて生きている人間の集団がキリスト教です。そうすると、この集団の中ではできる限りこの神のことばに忠実に生きていこうとする人間の態度が大切になります。信仰とは神のことばに従って、自らの生活を点検しながら日々過ごすことです。この倫理的態度は、自己という個人の世界にとどまるわけではなく、人間の生きる社会自体の目標としても考えられます。この社会は、神のことばに従う人間の営みを通してこのことばに接近することを目指さねばなりません。神のことばに活かされて、この地上に「神の国」を出現させよう、理想の国を創り出そうとするあり方です。このあり方を進歩的、楽観的に受け取ると、人間自身が最終的には神のことばを実現することができるのではないかと、同じになることはできなくとも、それに近い場所に到達することができるのではないかという信念も登場することになります。19世紀のキリスト教は、おおむねこのような傾向を持っていたと言えます。

しかし20世紀前半には、この神のことばの実現の可能性をめぐって批判的な見方が主流になります。この神のことばは、人間の営みの中で実現できるものではなく、むしろその営みを裁くことばになるという理解です。この時期には世界大の規模で戦争が繰り返し起こりました。人間が引き起こして悲惨な結果をもたらすのが戦争です。戦争は人間が作り出しています。そしてその戦争に関わった国々に、キリスト教を文化の土台とする国々がありました。キリスト教という宗教が力を持っている地域において、人間の営みとして戦争が起こり、殺戮がなされている。これでは神の国の実現などは遠い夢の国の事柄です。キリスト教とは何なのか、神の国とは何なのかという懐疑も出てきて不思議ではありません。そのような時代環境の中で、キリスト教を信じるか否かを問わず、人間存在の持つ本質的問題が提起され、神のことばと人間の営みとの離隔、神のことばに背を向けている人間のあり方に目が向けられるようになります。つまり、本質的な意味での神のことばとは、人間の営み——それには、人間の宗教的営みも含まれます——の問題性をあらわにするもの、その営み自体を裁くものだと考えられるようになります。たとえば、聖書は「隣人を愛しなさい」と教えてい

ます。しかし生得的に自己中心的傾向を持つ人間は「隣人」を愛することのできない存在です。真実に聖書的意味で愛していると思うのは、単なる錯覚だと言えます。それゆえ、この聖書の戒めは、逆にわれわれ人間存在の「愛せない」という現実、問題性を裁くことばとなっているわけです。

キリスト教ではそれを人間の罪と表現します。人間の本能的な欲求が神のことばを拒んでいく。宗教もまた、信仰の営みの場所であるばかりでなく、人間の欲求が渦巻く場所だと考えることもできるわけです。このような人間の営みとしての宗教はほめられたものではありません。人間が宗教的に生きようとした時のその営みそのものが、超越的な神のことばに裁かれるものとなります。その場合の神のことばとは、我々があやつるこの世界のことばではなく、人間の持つ可能性を超越したものであり、この世界を超えた「根源」を指し示すものであります。このような意味で、聖書のことばも神のことばであり、超越的根源を指し示すものと言われます。それゆえに、この神に由来するとされる聖書を指針として、それを尺度にしつつ現実の生を見つめなおしながらキリスト教共同体の営みがなされます。

しかし同時に、あたりまえの事ですが、聖書は人間の手を通して成立しました。初代の信仰共同体の中に伝えられてきた事柄が文字化され、さらにそれを編集しなおす作業を経て、聖書という文書が成立しました。新約聖書は、初代のキリスト教団に属していた人々の抱いた信仰を反映したものであり、その意味で人間の産物だと言えるのです。そうすると、このことばについて、一方では「神」そのもののことばであり、この世界、この人間を超えた仕方、こちら側に関わってくるものと見なされますが、もう一方では、人間が発することばを指し示すものとなります。それは、この超越的なことばに直面した側に生じたこの世界の、信仰のことばです。そして、このことばが人間の側に生じるという場合、この神のことばに触れあるいは忌避し、このことばに向かい合いあるいは背を向ける人間に生じて、人間の営みを現実形成していくものとしてそれを理解することができます。キリスト教におけることばは、この両者の意味を含んでいるのです。同じロゴス、ことばですが、根源としてのことばと、それに直面する存在としての人間の営みに現れることばとして二つの異なる次元で捉えることができるのです。この対面する営みの中で、ことばとしての聖書もまた作られてきたのです。そしてそのことばは、ちょうどイエス・キリストがことばであり、天地創造物語におけることばが出来事自体として拡大されて受けとられるように、人間の宗教的・思想的表現も、それに基づいた実践的なふるまいも、ことばとして考えることができます。かくして、神のことばに遭遇した人間の営みは、ある場合は理想を追求するものとして、ある場合は問題をはらむ人間社会の状況を作り出すものとして、さまざまな方向に分かれ行きます。

二 古代のキリスト論

以下、私は「根源」の光、超越的な神のことばを前にして立つわれわれ人間のことばとそのふるまいという観点から、とくにイエス・キリストという存在についての理解の歴史を振り返りたいと思います。あらかじめ申しあげておきたいことですが、キリスト教を思想史的に省みるときに、しばしば価値判断の尺度として「正統と異端」という構図が使われてきました。キリスト教の本質、イエス・キリストはかくかくの存在であるということについてのいろいろな理解のうちのあるものを取り上げて定式化した命題を形成し、それこそが正統的なキリスト教理解であるとして、それ以外の理解を排斥していく見方です。しかし、私はこの構図を積極的に使うことはいたしません。何が本来正しいのか、真理であるのか、という問いは宗教的真理の探究に常に付随してきました。最も「真理」に近いものを身につけたいというのは人間の欲求であるのかもしれませんが、そして、人々はしばしば真理と思われる教えを確定し、それに基づいて世界を秩序づけようとしてきました。しかし、このような構図、これこそが真理であるという判断をするということは、実は、人間が神に成り代わることであり、今、申し上げている「ことば」についての十分な反省がなされないところに生じてくるものだと言うことができます。真理を語りうるのは神だけである、ということが正しいのであれば、人間が介入する判断は常に暫時的判断となることをふまえておかねばなりません。

さて、2000年もの長い間続いてきた宗教であるキリスト教の中で、イエス・キリストはどのように考えられ、受け取られ、人々を導いてきたのかを整理する試みは必ずしも単純ではありません。冷静にキリスト教思想史を振り返ると、いろいろな見方があることが分かります。私は、ここでは、それぞれの見方をいくつかの観点から評価することを目指してキリスト論の領域から次の案内をします。キリスト論とは、神学の一部門で、「イエス・キリストは何であるのか」を問い、探求します。

キリスト教にとって、イエス・キリストという存在は決定的な意味を持っています。この人物がいなければキリスト教は成立しませんでした。このイエスという歴史上の人物は、パレスチナの地で30年あまり活動した後処刑されました。キリスト教にとってやっかいなことは、この歴史的人物の中に、キリスト教の依って立つ決定的なものを見ようとすることです。現実の歴史に生きた人間の中に決定的な意味を見い出して、「イエスという人間は神であった」ということを言おうとします。キリスト教は、イエス・キリストは神だという理解を受け入れることを通して、生きる力を獲得してきたわけです。しかし、この「キリストは神である」というものの見方には、細かく見

ていきますと、いろいろなオプションがあります。つづめて言えば、互いに簡単に融合しにくい三種類の理解があります。その三種類を、それに伴ういくつかの理解も含めて紹介します。

第一に、「先在のキリスト論」です。それに付随して「養子説」そして「クリスマス物語」があります。第二に「形而上学的キリスト論」、第三に「歴史的キリスト論」です。この第三のタイプは二つに分けて取り上げます。

まず「先在のキリスト論」です。イエスは、およそ2000年前の地中海東岸の地に、30年ほどの間生きて、種々の教えとわざをなした歴史的人物です。それが彼の地上の生涯ですが、「先在」という概念は、もともとキリストはこの世に生まれ落ちる前から神として存在していたということを意味しています。空間的に言えば、この地上ではなく天国に、父なる神のもとにいたわけですから。新約聖書「コロサイの信徒への手紙」には、「御子は見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生れた方です。天にあるものも地にあるものも、……万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました」（第1章15～16節）とあります。つまり、神の子キリストは歴史の一番最初、この世界が創造される時以前から存在していたのであり、この世界を造りあげたのは、この地上に生まれ落ちる以前の、天国にいたキリストであった。ところが、ある時になって、天にいたこのキリスト〔キリストとは「救済者」という意味です〕は、この地上に降りてきて、30年あまり生きて、十字架につけられた。その後、今度は復活して、しばらくこの地上で過ごした後に、また天に戻って行った。そういう考え方のキリスト理解です。

第一のこの例は、もともと天にいた神の子キリストが歴史的世界に登場し、また天に戻って行く、そういうキリスト論でしたが、この理解とは全く違う考え方も新約聖書に記されています。「養子説」と言われます。これに関係する聖書の箇所を見ます。それは新約聖書の「福音書」の物語です。「マルコによる福音書」冒頭にある当該箇所を引用します。

「そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降ってくるのを、御覧になった。すると、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が、天から聞こえた」（第1章9～11節）。

イエスはこの世に生まれ落ちて成長した後、ヨルダン川に現れ出て、先駆者として活動していたバプテスマのヨハネのもとに来て洗礼を受けました。洗礼を受けた後、まもなく天から聖霊が鳩のようにやって来て、イエスに降りました。そのイエスに対して、天から「わたしの愛する子」という声が聞こえるのです。この物語では、イエス・キリストはもともと神として存在していたのではなかった。人間としてこの世に

生まれ落ちたそのイエスが、人生の途上で「神」になった、神の養子になったと理解します。一般に後世に知られているさまざまな活動は、この「養子」となった出来事から始まっています。実を言うと、この「養子説」はキリスト教の歴史の中でメイン・ラインに乗ることができませんでした。「養子説」が登場し広がっていくプロセスで、それに強く反発する見方も登場し、「マタイ」および「ルカによる福音書」の冒頭を飾ることになりました。それは「クリスマスの物語」です。

今はちょうど12月ですが、キリスト教会ではキリスト・イエスの「降誕」を祝う準備がなされています。「マタイによる福音書」を見ましょう。「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである』』（第1章18～20節）。このクリスマスの物語は、イエスは人生の途上で神の子キリストになったのではなく、生まれる前からすでに神的存在——聖霊によって身ごもっている——であったと主張しています。これは「養子説」に対する強い批判でありました。

さて、「先在のキリスト論」あるいは「養子説」「クリスマス物語」は、すでにお分かりのことでしょうが、神話的特徴を持っています。事柄の本質を、できる限り空間的に、目に見えるような仕方で表現すると言いましょいか、具体的なイメージを伴って説明をしており、神話的ドラマ性を持っています。

新約聖書は、紀元第1世紀、イエスの死後7—80年の間に、そこに収められているおおよその文書がまとまることによって、今日の原形が成立しました。この新約聖書の中に、先在のキリスト論、養子説、クリスマス物語が入り込んでいるのです。文書がまとめられるプロセスでいろいろな理解が、反発しあったり、結合したりしながら、それらが併存する形で現在の姿にまとまりました。そしてその表現は神話的なドラマ性を持っています。しかしこれは、現代人の目からすれば、自然科学的に、論理的に、荒唐無稽です。現代人にとって荒唐無稽であるという意味では、次に案内する「形而上学的キリスト論」も同じです。もっとも、これは神話的ではありません。

「形而上学的キリスト論」とは、キリスト教がローマ帝国、地中海世界に広がっていった時代に、いろいろな論争を経てまとまった理解です。4世紀から5世紀にかけて開催された教会会議で、定式が確立しました。その後、中世のスコラ神学や正統主義と言われる17世紀のプロテスタント神学に引き継がれました。一言で言えば、イエス・キリストは完全な意味で神であり同時に完全な意味で人間であるという理屈です。イエス・キリストは徹底して神である、どのような意味でも神である。そしてまた同

じ意味で、徹底して人間である、どのような意味でも人間であるということです。今から100年ほど前に活動した著名なドイツのキリスト教歴史神学者にアドルフ・フォン・ハルナック（Adolf von Harnack, 1851-1930）という人がいます。ベルリン大学教授として、ベルリン・アカデミーの総裁として国の文部行政にも力をふるい、ヨーロッパ中に名を馳せた学者でした。彼はこの「形而上学的なキリスト論」他古代教会が形成したいわゆる教義について、「ギリシア精神が福音の土壌に作りだしたもの」だと表現しています。キリスト教はヘブライの文化に生まれ出ました。そしてそのキリスト教は西方、地中海世界に広がっていきます。そうすると必然的に、キリスト教成立以前から影響力豊かな哲学思想を産み出していたギリシアの文化——ヘレニズム——に行き当たり、ある種の変容を遂げます。つまり、「福音」というヘブライ的なものがギリシア的なものと出会い、その結果として、ギリシア的な洗練された概念手段を援用した形而上学的な把握が登場したのです。

古代のキリスト教会の課題は、一方では、異教との緊張関係の中で自らのアイデンティティを明らかにすることであり、他方では、内部の種々の立場の対立を意識してキリスト教的な理論を構築していくことでした。同じ時代に同様の課題を解決するために「三位一体論」も成立しました。本来、聖書には直接にこの三一性を表現している箇所はありませんが、いろいろな聖書の文言を整理・統合して、この三一論は形成されました。神は一つだけれども、三つの形を持っている、「父なる神」、「子なるイエス・キリストという神」、そして「聖霊という神」です。このトライアングルの構造をキリスト教の神は有しているという命題です。

さて、この形而上学的キリスト論も聖書の「先在のキリスト論」を土台にしています。しかし大きな違いは、このキリスト論は神話的でも物語的でもないことです。むしろそれは抽象的、哲学的です。古代教会は、ギリシア文化と接触する中で、物事を表現する手段としてその時代と文化に通用していた哲学的概念を利用して、自分たちが本来語り伝えてきた事柄を表現し直す試みをしたのです。その結果現れ出たのが、この「形而上学的キリスト論」でした。それゆえに、キリストは天にいたけれども、この地上にやってきて、また天に戻って行ったというような空間的、神話的表現ではなく、キリストは「神人である」「神と同質であり、人と同質である」というような説明をしたわけです。

この「形而上学的キリスト論」を見た時に、神学の世界で大切な二つのことが分かります。一つは、この古典的キリスト論も聖書の神話的表現と同じく、現代ではすでに了解しにくくなっていることです。「神であり同時に人である」ということは、論理的に言って理解しにくい。われわれの常識からすると、納得しにくいのです。しかし逆に言えば、これが第二のことですが、このキリスト論はその時代の地中海世界の

文化の中では了解し得る表現だったと言えます。それは、時代環境の中で、キリスト教の本質的な事柄を言い直す試み、再解釈する試みであったのです。われわれ現代人には、必ずしも理解しやすいとは言えない、時代遅れとも言える説明の仕方ですが、歴史のある時点でこのような言い直しの試みがなされるということは、その時代その時代に、あるいはその文化その文化に、本来はその中で理解可能な言葉でキリスト教信仰にとって最も大切な事柄、つまり「神のことば」は言い直されるべきであるということを示しています。その試みの一つがこれなのです。そうすると、この古代教会が形成したキリスト論は、その時代環境に適合したにしても、いつの時代にも無条件で通用するわけではないことも分かります。われわれもまた自分たちの生きている時代を念頭に置いて「神のことば」を表現し直さなくてはなりません。これはキリスト教神学の課題です。

この「形而上学的キリスト論」は、一般に正統主義神学と言われる17世紀のプロテスタント神学に受け入れられました。私の勤務している同志社大学はプロテスタント・キリスト教の流れに由来します。このプロテスタント・キリスト教とは何でしょうか。キリスト教には大きく分けて三つの潮流があります。古代地中海世界の東部で活動した東方オーソドックス教会（日本では正教会と言われます）、西方ラテン世界に広まったカトリック教会、そしてこのカトリック教会から分かれ出たプロテスタント教会です。最初の二つの教会が分裂したきっかけは、地中海世界の東側がギリシア語を話し、西側がラテン語を話していたということ、言語文化圏が異なっていたことにあると言われます。その二つの文化圏でキリスト教は独自に発展し、ある時から、合一しがたい差異というものあらわになりました。東方オーソドックスのキリスト教は、現在も東ヨーロッパ、ギリシアやロシアに力を持っています。西ヨーロッパのカトリック・キリスト教は、16世紀の宗教改革をきっかけに分裂して、ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会の流れが成立しました。キリスト教の伝統的な三潮流として、それぞれ世界各地で活動しています。

そのプロテスタント・キリスト教の中で、17世紀に主流になった立場が正統主義と言われます。その時代には、キリスト教各教派の緊張・対立がありました。具体的には、カトリック教会と二つのプロテスタントの教派、宗教改革者マルチン・ルターに拠り所を見いだすルター派教会、カルヴァンやツヴィングリなどの流れを組む改革派教会です。この中にいた人々は、残りの二教派に対し自らの立場の「正統性」を主張して理論構築をしていました。それゆえに、この対立を表現してこの時代を教派対立の時代とも言います。

三 近代のキリスト論と歴史意識

ところが、18世紀の啓蒙の時代になると、17世紀に強い影響を与えたこの「形而上学的キリスト論」とは違うタイプの考え方が発展してきます。それが「歴史的キリスト論」です。このキリスト論が登場してくる背景には、「形而上学的キリスト論」が伝える古典的な教えがあまりに思弁的・哲学的であり、しかも近代的な世界観とは和合しがたいのではないかという意識があります。「形而上学的キリスト論」は、知的に、学問的なレベルで、多くの論争を経てキリスト教の理論として構築されてきたものであり、抽象的・理論的傾向を持っています。しかし、宗教の世界は知的エリートだけで営まれているわけではありません。すべての人間を射程に捉える民衆性を持っており、人間存在の全体を包括する営みです。そのように見ると、きわめて抽象的な「形而上学的キリスト論」は一般民衆の心に訴えにくいものだと言えます。さらに、古代教会において構築されたこの理論に対して実証主義的、自然科学的世界観が力を持ち始めた社会において、疑念も生じてこざるを得ませんでした。実際に歴史に生きたイエスはどのような存在であったのか、それを伝統的キリスト論が教えるわけではありません。そこから徐々にイエス・キリストを歴史的に、実証的に見ていこうとする態度が発展してきました。

ただし、この見方も聖書の中にきっかけがあります。「ルカによる福音書」あるいは「使徒言行録」を見ると、歴史的なものの見方が登場します。これも神話的な装いを身につけています。世界は神によって造られた（天地創造の物語）。そしてその時に人間も造られた。ところが人間アダムとエバは、ヘビの誘惑に負けて墮落します。この墮落した人間の住む世界にキリストが登場して、この世界の質を根本的に変容させてしまいます。新しい時代が、イエス・キリストとともに始まります。その時代がしばらく続いた後、いずれこの世界は終わりを迎える。その後はどうなるのか。最後の審判を経由して、天国に行く人々と地獄に行く人々に分かれるのかどうか、分かりませんが、ここには始めと終わりを持つ歴史があり、時間軸の真ん中にイエス・キリストが現れて、この世界を決定的に新しい世界にしたのだという理解が現れています。一般に「救済史」的な理解と言います。歴史とは、人間とこの世界が神によって救済されていくプロセスであるという見方が素朴に現れています。典型的に述べますと、「先在のキリスト論」は空間的な発想を軸にして物語られています。天国があつて、地上がある。キリストは天国から地上に到来してまた天国に戻る。「歴史的なキリスト論」は、時間的な発想であり、始めがあり終わりがある。その真ん中にキリストが到来するのです。

さて、この歴史的な見方が現代に通じる道筋の中で本格的に登場してきたのは、18世紀、啓蒙主義の時代になってからです。この啓蒙の思想において、現代につながる自然科学的、実証主義的世界観が力を持ち始めます。この歴史理解が、神学的歴史観である救済史的理解に疑問符をつけるようになるとともに、新しい世界、新しい時代をもたらした救済者キリストという伝統的な構図も問題視されることとなります。それに代って、実際のイエスの生涯はどうであったのか、どのように生きて、何を教えたのか、ということに対する関心が増大してきます。ここに、近代的な歴史学的方法に基づくイエスの生涯研究が生成します。いわゆる「イエス伝研究」です。

それでは、この18世紀より本格的に始まった歴史学的観点から聖書を研究していくと、イエスはどのような存在になるのでしょうか。今まで見てきた伝統的な理論は、基本的に聖書に資料を求め、そこに記述されたことを素朴に受け入れるところから出発しました。しかし歴史学は「それは実際にそうであったのか」という問いを投げかけます。かくして、神学の中に、とりわけイエス・キリストという歴史上の人物を探求、解明する学として歴史的批評的学問が入り込んできます。

ところで、初期の頃は、歴史学的研究は事実を明らかにして、イエスの実像に到達することができるという期待に燃えていました。ところが研究が進展していく過程で、それはうまく行かないということも徐々に見えてきます。どのように努力しても鮮明な仕方ではイエスの実像にたどり着くことはできない。イエスに出会った人々やイエスの事柄を伝聞した人々の伝えた事柄は聖書に記されています。それらの記録を媒介にして、間接的には分かるのですが、実像にまではなかなか至ることができない。このことが歴史学的探求の成果として分かってきたのです。キリスト教の中に生きる者の本来的な欲求として、何とかして実際のイエスを見極めようと追求するのですが、うまく行かない。そのようなプロセスを経て、イエスの実像は分からないのだから、現実のイエスに焦点をあてるよりもむしろ、イエスが語った教え、ふるまいに関心が移り、それが人々に与えた影響の探求がなされていきます。

20世紀前半に活動した神学者にアルバート・シュヴァイツァー（Albert Schweitzer, 1875-1965）という人がいます。日本では、生涯の後半をアフリカで医療活動にささげた人、バッハの奏者、研究者として有名です。彼の若い時代の専門領域は神学であり、この領域でとりわけイエスの生涯がどのように研究されてきたのか探求し、古典的となった著作『イエス伝研究史』を残しています。シュヴァイツァーはイエスの生涯を研究する中で、イエスという人間は実はもうすぐこの世界に終末がやって来ると信じていたのではないかということを描きます。「マルコによる福音書」には「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（第1章15節）という表現があります。「神の国は近づいた」というのは天国が近づいた、つまりこの世界が終わりを迎

えるというように言い直してもかまわないでしょう。細かいところではイエスについて分からないのですが、多くのすぐれた研究の結果、イエスは近代人の常識である自然科学の、またヒューマニズムの理想を具現した人物ではなく、古代の観念世界に生きて終末を信じた人のようだということが分かってきたのです。つまり、この世に終わりが来るので、心して準備をするようにと語りかけ、新しい倫理を提唱した説教者であった。そして聖書の物語が示すように、奇跡行為をなしたり、悪魔払いをするエクソシストでもあっただろうと言われます。

そうなってくると、この古代人イエスも現代人にそぐわないものになってきます。19世紀には、イエスは人間性の理想であると捉えられて、このイエスを模範として、それに従って生きるところに意味を見いだそうとしました。ところが理想化されたイエス像は、さらに研究が進むとやはり2000年前の時代の子であったということが分かってきて、力をなくしていくのです。

そうすると、キリスト教というのはそもそも何なのか、ということについての戸惑いのような問いかけもなされてきます。神学という学問は、キリスト教を弁明する学問であると同時に、キリスト教そのものを批判的に吟味する、その信仰というものをできる限り徹底して言語化して解明しようとする欲求を持っています。わけの分からないものをそのままにしておくのではなく、できる限りの方策を使って、真実にキリスト教的なものを探究したい、そこに現れた真理は何なのかを解明したいという欲求を持っています。

今述べたことを整理しますと、イエスは現実の人間として活動していた。彼はその時代の中で、人々に語りかけ、教え、さまざまなわざをなした。このイエスを一方の側とすると、このイエスに向かい合った側、すなわちイエスに従った人々、弟子たちの集団があります。つまり、この両者が対面した出来事、出会いの歴史が、キリスト教を成立させた、イエスと出会った側が、その出会い、イエスとの人格関係を通して心に刻みつけた事柄、人々の思いがキリスト教を成立させたと言うことができます。

確かなこととして言えることは、キリスト教的な事柄のすべてをイエス本人の教えやわざに直接的な仕方で遡らせることはできないということです。しかし、イエスと出会った人々が、どのような思いを身につけ、どのような考え方をもってその後生きていったのか、その部分については、いろいろと調べていくことができるわけです。このこちら側の思想を「キリスト教団の信仰思想」とでも表現することができるでしょう。そうすると、初期のキリスト教団の形成した信仰思想が、聖書という文書に現れていると言えます。キリスト教とは、イエスの営みではなく、イエスの周りに集まった人々の営みであり、その人々の営みをきっかけにして発展してきた宗教であると言えるのです。

新約聖書の中には、イエス・キリストの史実的側面ではなく、この存在と出会った側の理解を大切にする見方も登場しています。新約聖書後半に書簡類が収められていますが、その一つ、パウロの書いたと言われる「コリントの信徒への手紙一」には、「兄弟たち、わたしもそちらに行った時、神の秘められた計画を宣べ伝えるのに、優れた言葉や知恵を用いませんでした。なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです」(第2章2節)という告白があります。あるいは同じ著者の「ローマの信徒への手紙」を見ると、「だれがわたしたちを罪に定めることができます。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです」(第8章34節)と記されています。パウロは、もはや地上のイエスの生涯を知ろうとしません。客観的に人間イエスを知って、そこに遡ろうとしません。現実の歴史的な人物の具体的な生涯ではなく、十字架につけられて復活したキリストを知るところに、つまり、十字架と復活という人間世界を超えた神的次元でイエスを捉えようとするところに、パウロの姿勢があります。パウロは、どのような仕方であれイエスから影響を受けた人々の側のものの見方に自分の信仰を位置づけて、そこからキリスト教信仰を展開しようとするのです。

まとめたいと思います。最初に、キリスト教ではことばは種々の次元で語られることを紹介しました。そしてキリスト教とは「神のことば」に直面した人間の営みであると申し上げました。キリスト論の類型について案内しましたが、それらの諸類型は、時代とその環境の中で、イエス・キリストとの、本源的なもの、根源的なものとの出会いを通して形成されたのだと言えます。一言で言いますと、キリスト教信仰とは、ことばそのもの、根源的なことばそのものに出会った人々の営みです。主調は生の営みとしての人格的事柄です。聖書という文書を媒介にして、何なりかの神的事柄に出会った人々の営みです。その出会いは、相手と自分との関係の中で生じるわけですから、決まり決まった表現で一つにまとめてしまうことは困難です。自分が変容すれば、相手との出会いとそこから出てくるものもまた変容します。キリスト教とは神のことばと種々の仕方出会った人々の営みとして、それ自体が多元的なものであるのです。

本稿は、1998年12月14日に龍谷大学大宮学舎で開催された龍谷大学現代教学研究會主催の会における講演を文章化したものである。